

本書は社会学の研究の進めかたに戸惑いがちな学生や大学院生を念頭に、家族研究者を中心とする11名によって書かれたものである。

本書の特徴は、質的研究と量的研究の垣根を越えているところであり、自分の研究テーマに合致した社会学の研究方法は、どのように研究を進めていけばよいのか、その感覚を養うテキストとして、優れた内容になっている。本書は「社会調査」の枠を超えた、例えば歴史資料や新聞・雑誌記事の調べ方、公的統計や二次分析の活用も含めた構成になっており、研究法の豊かなバリエーションを提示することで社会学的研究の魅力が伝わる内容になっている。方法論のテキストでは、アンケート調査やライフストーリーなど、特定の研究法に限定されたものが多いが、これらの専門的な方法論のテキストに入る一歩前に、ぜひ本書を手にとってほしい。

本書の構成は、第1部「フィールドに出かける」、第2部「文書資料を読む」、第3部「量的データを扱う」であり、それぞれの部は4つの章から成る。第1部にはインタビュー調査、エスノグラフィー、フィールドワーク、会話分析が、第2部には歴史資料、新聞・雑誌記事、公的な文書資料、古典的な学説の研究が、第3部には調査票調査とデータ分析、公的統計、二次分析、国際比較研究が収録されている。各部の内容をごく簡単に紹介したい。

第1部は、研究対象となる人から話を聞いたり、人々のやりとりを観察したりするなど、他者と出会うことが研究のプロセスにおいて大きな意味をもつ研究タイプがまとめられている。インタビューをして、録音記録を文字起こししたことがある人なら経験したことがあると思うが、語りを要約して羅列するだけでは分析にならない。質的なデー



## 基礎からわかる 社会学研究法

具体例で学ぶ研究の進めかた

松木洋人・中西泰子・本多真隆

編著

ミネルヴァ書房  
2023年  
A5判, 252頁  
2,800円+税

タの収集と整理にとどまらず、どのような点にどのように着目するのか、先行研究の検討から分析の視点を研ぎ澄ますことの重要性が各所で指摘されている。

第2部は図書館などで収集した文献資料との対話が軸となる研究タイプである。国定修身教科書、『主婦之友』、読売新聞の人生案内、母子健康手帳など多様な資料の研究が取り上げられており、過去の社会通念や社会規範、「望ましさ」がいつどのよ

うに生成されたのかを問う歴史社会的視点によって、現代社会の「あたりまえ」を相対化する研究の面白さを感じることができる。

第3部は数量的データの統計分析にもとづく研究タイプである。自分で調査票を作成し、データを集め、分析する手順の紹介は第9章にまとめられており、残りの章は既にある数量的データの二次分析や公的統計の活用重点が置かれている。『労働力調査』のデータによる主婦化／脱主婦化の分析や国際比較調

査の回答バイアスの例示などは鮮やかであった。

以上のように、本書は社会学の基本的な方法を具体例や執筆者の体験・ノウハウを交えて、初学者に分かりやすいかたちで伝えている良書である。デジタルネイティブのZ世代以降の学生たちは、図書館に足を運んで分厚い資料をコピーすることや、現地でのフィールドワークが苦手かもしれない。今後は、ソーシャルメディア上の情報や企業のビッグデータなどを活用した分析も増えてくるだろうが、本書のようなオーソドックスな研究スタイルをまずは知ってほしい。本書を読んだだけで、すぐに何かの研究ができるわけではないが、本書を経由してからより深く特定の方法を学ぶことで、自分が選んだ方法の特徴をよりよく把握することができるだろう。